**「ラーマクリシュナの『福音』」勉強会　第２９回　（２０１６年　１０月１１日）**

**・第２９回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」７頁**

**・📖 （読む）「師と弟子」　６頁下段Ｌ２２～７頁上段Ｌ３**

***形のある神も形のない神とまったく同じように本物だ、ということをおぼえておいで。ただしお前自身の信念は固く守るようにしなさい」***

***両方が同等に真理である、という主張はMをびっくりさせた。彼は、書物からは決してこれを学んだことがなかったのである。***

（解説）

なぜMさんはびっくりしましたか？

なぜなら、これまでに勉強した本の中にそのことは書いていなかったからです。たとえば白いものと黒いものが一緒にならないように、形があるものとないものはひとつにはなりませんね。これはMさんだけでなく、誰でも同じように混乱が出ます。

しかしシュリー・ラーマクリシュナは形がある神もない神も両方正しいと言っています。

そのことについて今から説明します。

世俗的なレベルでの問題について考えてください。例えば数学の問題をある生徒が分からなければ、先生が説明します。もしその先生が分からなくても、もうちょっと頭のいい人には解決できます。世俗的な問題は、頭と感覚を道具のように使って解決します。

しかし霊的な問題は頭と感覚（「インテリジェンスとセンス」）では解決できません。

たとえば「人の死」について考えてください。目や耳などの感覚と頭で「人の死」を考えたとき、「すべて燃やして終わり」です。灰以外に何も残らないと考えます。それなのにまだ何かが続いていると考えるのは普通の考えでは変ですね。

お葬式の時に亡くなった人のために食べ物をお供えします。儀式ですから、伝統的なものには従わないと批判されますから皆さんお供えをします。しかし、普通の人は、亡くなった人が来て供物を食べるとまでは考えないです。そう考えたとしても、心の中では「亡くなった人がここにきて食べるのだろうか？」という疑いがありますでしょう。亡くなったらすべてが無くなる。どうしてお葬式の時にお供えをするのか──そのように考えている人が増えています。なぜならこの問題は感覚と心では理解できないからです。

本当は、人は亡くなっても精妙な体と魂は続きます。

だから前世を覚えている人もいるのです。お化けも絶対にいます。しかし感覚や頭では理解できないですし、結論も得られません。

神様についても同じです。神様がいるorいないといった霊的な問題は普通の感覚、頭、知性では理解できないですね。それのために別のレベルで理解しないといけない。

霊的な真理のことを本当に知りたいなら、感覚や知性のレベルを超越しないといけないです。聖者たちは超越した状態で霊的なこと、例えば

・神様の本当の本性

・神様がいるorいない

・神様には形があるor形がない

・魂はあるor魂はない

・どのように魂の状態が出るか

などを理解しています。

ではどのように普通の感覚、知性を超越しますか？

**感覚と心を制御して**

**感覚と心を抑制して**

**とても純粋になって**

**感覚、心、頭、体を純粋にして**

**真理のことを集中して考えると**

**超越することができます。**

霊的な真理を知るのはこの方法だけです。聖者たちもそのようにしていろいろと超越してその状態に入っているので、霊的な真理のことをよく御存じです。

Mさんは普通の人でしたね。普通の信者でしたから、神様の形があると形がないの両方が正しいというのは矛盾だと考えました。

シュリー・ラーマクリシュナのレベルは違います。霊的なレベルの聖者でしたから真理を知っています。

ですから両方の矛盾を合わせることができると知っています。

では、どうして合わせることができますか？

なぜなら議論の対象となっているのは神様ですから。

**神様は、全知、全能、遍在、ですから。神様は何でもできます。**だから、神様という同じ存在について、形がある状態も、形がない状態も、ともに本当だと言えるのです。

神様は、すべての力があります、すべての知識を持っています、

あらゆるところにいます、何でもできます。

**知識を持っている人のしるしは、「神様は何でもできる」「普通の人と神さまはそれくらい違う」ということを理解している**ことです。

こんな物語があります。

**知識がある人とない人の考え方の違いの例**

ある人が天国に行きました。天国から戻ると二人の人がその人に尋ねました。

「神様は天国で何をしていたかあなたは見ましたか？」

その人は答えました。

「神様が針の穴にラクダを通しているのを見ました」

それを聞いた二人のうちの一人は

「あなたは嘘をついていますね。なぜならそんなことは絶対にできないはずです。あなたは天国には行っていない」と言いました

もう一人の人は同じことを聞いて

「神様は何でもできるのですね」と言いました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『福音』P58）

**・📖 （読む）「師と弟子」　７頁上段Ｌ３～７頁上段Ｌ１４**

***このようにして、彼のエゴは三つ目の打撃をこうむった。しかしそれはまだ完全にはつぶされていなかったので、彼はもう少し師と議論をしようと進み出た。***

***M「師よ、人が形のある神を信じるといたします。その神はけっして土の像ではございません」***

***師（さえぎって）「だがなぜ土などと言うのだ？　それは霊の像なのだよ」***

***Mはその「霊の像」の意味がよくわからなかった。「しかし師よ」と彼は言った、「土の像を拝んでいる人びとには、それは神ではないということを。そして、それを拝むときには土の像ではなしに神を心に描かなければいけないことを説明してやらねばなりません」***

インドでは神様の像を作って礼拝しています。日本でもありますね。七福神のなかのいくつかはインドから来た神様です。それだけではなく、インドの死の神：ヤマは日本では閻魔様ですね。成田山や大きなお寺でその像を見たことがあります。インドの神、日本の聖者、だけでなくお釈迦様の像も作っていますでしょ。その像を祭壇において飾ってお供えもします。キリスト教ではマリア様、イエスの像がありますね。

それらの像は何で作られていますか？

土、石、木材、金、銀、銅などの金属、などで作られていますね。像は、本当は土や木材です。そしてMさんは「神様に形はあるけれども、土の像は神様ではない。土の像は土の像です」と言いました。

その混乱はMさんだけではなく、現代の人びとの中にもあります。ヒンズー教はいっぱい像を礼拝するので他の宗教が批判することがあります。例えば石でできている神様の像があるとします。石は神様ではありません。だから石の像を礼拝するのは間違いではないですか？　それがMさんの質問、疑いでした。

それに対してシュリー・ラーマクリシュナの答えは

**土ではありません。それは霊の像です。**

霊の像を理解するにはちょっと想像力が必要ですね。なぜなら普通は霊で像を作ることはできないです。霊はとても精妙ですから。ですけれどももうひとつの考えで、それも出来ます。想像すると出来ます。そのためにはミディアム：媒体が必要です。例えば電気は電線という媒体を通して流れています。電気には電線という媒体が必要であるように、霊の像にも媒体が必要です。例えば土や石や木材を媒体として使わないと、霊の像のことを普通の人は考えることができないです。礼拝はできないですね。

神様の像に対する見方には２つあります。

①神様の偶像礼拝を信じていない人々、像を通して礼拝する伝統のない人々、何も信じていない人々は、「像を礼拝している人は土や木材を礼拝している」「人の形をした人形を礼拝している」と考えます。

②神様の像を礼拝する伝統を持っている人々は、像を例えばお釈迦様だと考えます。木材の像を木材だとは全く考えません。

ある信者が仏教のお寺に行ってお釈迦様の像を礼拝します。そのときその信者は、木材を祈っているとは一度も考えません。木材の前にお供え物をしますとは考えません。なぜなら木材は媒体ですから。信者は媒体の中の霊の像のことだけを考えています。霊のことを考えます。仏教徒はお釈迦様、キリスト教徒はイエス、ヒンズー教徒はドゥルガー、カーリー、シヴァなどを像の中に考えます。

神の像を通して礼拝する人びとの中にも２つの考え方があります。

①普通の信者はお寺に入ってお釈迦様の像を見て、それをお釈迦様だと思って祈ります。

②議論の好きな人、論理的な人は、「この像は、本当は木材で出来ているが、その中に神様が存在しています。だから我々は礼拝する」と考えます。Mさんはそのように考えて、

「普通の信者がお寺に入って、神様の像を神様だと考えています。しかしそれは間違っています。像は、本当は木材で出来ているが、その中に神様がいます、霊の像があります。だから霊の像に礼拝してください。そのような助言が必要ではないでしょうか」とシュリー・ラーマクリシュナに言いました。

**・📖 （読む）「師と弟子」　７頁上段Ｌ１５～７頁下段L１１**

***師（きびしい調子で）「それがお前たちカルカッタの連中の唯一の道楽なのだ──説教をして、他人を教化しようとする！　誰一人、考慮して自分が教えを受けようと考える者はいない。他人を教えるというお前たちは一体何ものなのだ。***

***宇宙の主でいらっしゃる彼が、あらゆる者にお教えになるのだ。この宇宙をおつくりになった彼だけが、太陽と月をつくり、人と獣と他のすべての生きものをおつくりになった彼だけが、われわれをお教えになるのだ。彼らに生命を維持する方法を教え、子供たちに親を与えてその親たちに彼らを育てる愛をお授けになった彼だけが、われわれをお教えになるのだ。主はじつにさまざまのことをしておいでになる──彼が、ご自分を拝む方法を人びとにお教えにならないなどということがあろうか。もし彼らが教えを必要とするなら、そのときには彼が教師におなりになるだろう。彼はわれわれの、内なる導き手でいらっしゃる。***

***かりに土の像を拝むことに何かの間違いがあるとしても、それによって神だけが呼び求められていることを彼がお知りにならないかね。彼は拝まれているという、そのことだけでお喜びになるであろう。なぜそのことでお前が頭を痛めなければならないのか。お前は自分の知識と信仰を求めて努力した方がよい」***

***このたびは、自分のエゴが完全に砕かれたことをMは感じた。***

カルカッタの人だけではなく、みんな同じです。われわれはちょっと勉強すると、いっぱいうぬぼれが出ます。他の人が間違っていて私が正しい。だけではなく、その人は間違っているのだから直さなければいけない、と考えます。しかしそれは、本当はうぬぼれです。

うぬぼれを取り除くために、シュリー・ラーマクリシュナはMさんに厳しい言葉を使いましたが、その中には、

**・あなたは正しいですか？**

**・あなた自身は真理のことを知っていますか？**

**・知らないですけれども、他の人に教えたい。ちょっとだけ勉強して他の人に教えたい。**

**・その考えの源はうぬぼれです。プライドです。**

**・うぬぼれはよくない。自分が知らないというのに。**

といった意味が含まれていました。

そしてそのことについてのシュリー・ラーマクリシュナの助言は、

**・まず最初は、あなたが真理のことを理解してください。**

**最初の目的は自分が完璧になることです。自分で勉強してください。他の人を教えることを最初は考えずに、自分のことを考えてください。**

**・ある人の間違いをあなたが教えて説明しないと、その人の過ちがずっと続くと考えていますが、それはうぬぼれです。ある人の間違いを直すのは神様がなさること。あなたが心配することではありません。**

本当に知識を持っている人にうぬぼれは出ません。不完全な人、知識があまりない、少しだけある人は、うぬぼれが出ます。

神様が人の過ちを直してくれる、とどうして言えるのでしょうか。

我々は皆、神の息子、娘です。ですからもし我々が間違え、理解できないと、神様が理解できるように準備します。だからあなたは他の人の間違いを心配する必要はないです。神様が心配してくださいますから。あなたは自分がどのように勉強するか、真理をどのように悟るか、それを考えてください。他の人のことを考える必要はないです。

なぜならひとつは、あなた自身が不完全ですから、あなたにはできない。

もうひとつは、神様が全部知っていて、準備してくださいますから。

神様はすべてを準備しています。食事やいろいろ、いっぱいいっぱい。もしある人に知識の問題がありますと、知識を与えます。だからもし土の像を礼拝することが間違いなら、神様が直します。あなたは心配しなくていい。

もうひとつの考えは、ある信者の目的が神様を礼拝したいということであれば、礼拝の仕方が問題でも神様は気にしません。方法はそんなに大事ではない。目的が大事ですから。神様は全知ですから。

**上手に「パパ」と言える息子と「パー」としか言えない赤ちゃんの例**

ある男性には二人の息子がいました。その上の息子はお父さんを呼ぶとき、「パパ、パパ」と呼びますが、下の赤ちゃんはお父さんを「パー、パー」としか呼べません。しかしお父さんには赤ちゃんが自分のことを呼んでいると分かります。お父さんは「パパ」と上手に呼べる上の息子のほうをより愛しますか？　そうではありません。「パー」しか言えない赤ちゃんをもっとかわいいと思っているかもしれません。ときどきもっと愛が現われます。それが面白い。

神様はどんな礼拝方法でも気にしません。それに間違いがあれば直します。

あなたが心配する必要はありません。それにあなたの心配の源は、すこし勉強しただけで自分はたくさん知っているといううぬぼれです。他の人に教えたがる前に、あなたが理解しなければならないのはまずそのことです。それだけでなく、シュリー・ラーマクリシュナは言っていましたね、人に教えることについては神様から命令がくだる（☞『福音』p699ほか）、と。人に教える、教えないは自分のうぬぼれで決めてはならないのです。

ところで、シュリー・ラーマクリシュナはどうしてMさんに厳しい言葉を使いましたか？

なぜなら**特別な目的**のためです。

シュリー・ラーマクリシュナはどの信者が何をするか前から決めていました。例えば、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはシュリー・ラーマクリシュナの教えを広めるのが役目です。

Mさんには、シュリー・ラーマクリシュナは何の仕事を決めましたか？

Mさんの役目は、シュリー・ラーマクリシュナの言ったことを全部書くことです。そして正確に皆さんにシュリー・ラーマクリシュナの言葉を伝えることです。例えば本やいろいろな手段で。もしMさんが議論好きだと、シュリー・ラーマクリシュナの言うことをちょっと編集して書く可能性があります。ですのでMさんのうぬぼれを全部取り除くために、とても厳しい言葉を使いました。そして「他の人を直すことを考えないでください、まず自分を完璧にしてください。自分が神を信じてください」と言いました。

Mさんにうぬぼれや議論があるあいだ、シュリー・ラーマクリシュナの言葉を記録するときに、Mさんが説明を加えたり、ある部分は書いて、ある部分は書かなかったり、じぶんでチョイスする可能性があります。自分の考え自分の言うことを、シュリー・ラーマクリシュナの教えの中に入れる可能性があります。ですので、Mさんのうぬぼれ、議論を全部取り除けば100パーセント、シュリー・ラーマクリシュナのことだけを書きます。自分の考えは何も書かない。うぬぼれがある間それはできないでしょう。そのためにそんなに厳しい言葉、固い言葉を使いました。

（『福音』勉強会第２９回以上）